

後鳥羽上皇と隠岐

島根県古代文化センター

主任研究員 田村 亨

はじめに

- 後鳥羽上皇(後鳥羽院) …鎌倉時代のはじまりとともに出現した「治天の君」
- 「治天の君」とは? …天下を治める君主、天皇の家(王家)の家長
 - ・平安時代末～ 天皇の位退いた太上天皇(上皇、出家して法皇) = 院が政治の実権握る
 - ・鎌倉時代 依然として京都に政権(朝廷)所在、院が「治天の君」として国政のトップに立つ
- 「治天の君」でありながら、隠岐国へ配流された後鳥羽上皇 その人物像について考える
 - ・隠岐配流以前の前半生
 - ・隠岐配流後の生活
 - ・没後のイメージ

1. 後鳥羽上皇の前半生—承久の乱まで—

(1) 後鳥羽天皇の誕生

- 治承4年(1180) 高倉天皇の第四皇子として誕生(尊成)
- 寿永2年(1183) 木曾義仲の入洛、平家の都落ち
 - ・〈平家〉安徳天皇と守貞親王、三種の神器(神鏡・神璽・宝剣)をともない都落ち
 - ・〈義仲〉北陸宮(以仁王の遺児)擁立はかる
 - ⇒ 〈後白河院〉惟明(5歳) or 尊成(4歳) → 尊成が選ばれる
- 尊成 → 寿永2年(1183)「踐祚」 三種の神器「如在の儀」
 - ・元暦元年(1184)「即位」、大嘗会/元暦2年 壇ノ浦の戦い → 神鏡・神璽を奪還 ⇔ 宝剣紛失
 - ・建久元年(1190) 後鳥羽天皇の元服(11歳) 宝剣代を用いる
- ★後鳥羽天皇 = 源平内乱の中で、突如皇位につく/神器不在というコンプレックス

(2) 「治天の君」後鳥羽上皇

- 建久3年(1192) 後白河院没 / 建久9年(1198) 土御門天皇即位 → 後鳥羽上皇
 - ・正治2年(1200) 『正治初度百首』…歌人たちに一人100首の和歌を詠進させる
 - ※御子左家(藤原俊成・定家) — 九条家 ⇔ 六条家(六条季経・経家) — 源通親
 - 九条良経・慈円(九条家) や源通親、御子左家と六条家の歌人たちバランスよく参加させる
 - 治天の君のもとにすべての貴族を結集させようとする後鳥羽院の政治体制の反映〔上横手09〕
 - ・建仁2年(1202) 源通親急死、旧後白河院側近勢力の弱体化
 - ⇒ 後鳥羽院政の本格化

2023年9月17日(日) 於 隠岐島文化会館

第25回 隠岐国巡回講座

○後白河と後鳥羽

- ・後白河法皇 = 本来中継ぎの天皇／鳥羽一美福門院系統の皇位継承路線からはずれる(近衛→二条)
後鳥羽上皇 = 治天の君である祖父・後白河院に認められた皇統

- ・後鳥羽上皇 = 和歌を中心として多種多様な芸能に精通〔目崎01〕〔辻17〕
管弦(笛、琵琶)〔豊永00/17〕、蹴鞠〔秋山00〕、武芸〔秋山03〕、狩猟〔中澤97〕
学問・詩文、連歌、舞、猿楽 など

〔辻17〕〈後白河院〉都市民による新興芸能(今様→白拍子、読経、蹴鞠など)取り込み
詩歌管弦(伝統的な天皇の芸能)には熱心ではない

〈後鳥羽院〉新興芸能継承+詩歌管弦にも注力 「諸道の興隆」=理想の帝王像

- ・鳥羽殿…鳥羽院政期整備された院御所、白河一鳥羽一近衛一二条という皇統強く意識する場
後白河院によってあまり顧みられなくなる〔美川01〕

⇒ 後鳥羽院は度々鳥羽殿で芸能に興じる／白河・鳥羽院継承する正統性誇示〔美川14〕

→ 後白河院の特徴も継承しつつ、中継ぎではない、正統な皇統であることを意識

○『新古今和歌集』 後鳥羽上皇のもと編まれた勅撰和歌集

- ・建仁元年(1201)院御所(二条殿 弘御所北面)に「和歌所」設置
- ・和歌所寄人 = 殿上人が中心、九条良経(左大臣)、源通親(内大臣)など
撰進実務 = 藤原定家(御子左家)、藤原家隆など6名

⇒ 従来の勅撰集: 撰編者は地下の卑官、『拾遺』『後拾遺』撰者1人〔上横手94〕

- ・元久2年(1205)後鳥羽に撰進 / 以後も後鳥羽自身による改訂進む
= 治天の君が選んだ正真正銘の勅撰集

○「延喜天曆」=醍醐・村上天皇の時代／中世の貴族たちが理想史

- ・『新古今和歌集』序 = 延喜(古今和歌集)・天曆(後撰和歌集)への回帰〔上横手94〕
元久2年(1206)「竟宴」=『古今和歌集』撰進から300年
- ・琵琶の名器「玄上」(玄象)の演奏…玄上 = 醍醐天皇・村上天皇の御物〔豊永00/17〕
- ・狩猟 宇多天皇・醍醐天皇の野行幸(鷹狩)などの故実を意識カ〔中澤97〕

★後鳥羽上皇 = 後白河院に認められた皇統(中継ぎではない = 後白河院との違い)

内乱の中、神器不在のまま皇位についたコンプレックス

→ 治天の君としての強い自我の中で、理想の君主像を追求

(3) 上皇配流の衝撃 —承久の乱と鎌倉幕府—

○承久3年(1221)後鳥羽上皇軍と鎌倉幕府軍が軍事衝突 = 承久の乱

- ・承久元年(1219)將軍源実朝暗殺 → 実朝没後、後鳥羽と幕府間の関係悪化
- ・承久3年5月 後鳥羽軍、伊賀光季(京都守護)を追討 / 義時追討院宣・官宣旨発給
6月 北条泰時・時房など幕府軍上洛、京都攻略
7月 後鳥羽出家、隠岐配流(土御門 = 土佐 → 阿波 / 順徳 = 佐渡 / 雅成 = 但馬 / 頼仁 = 備前)
後堀河天皇即位、後高倉院政の開始

2023年9月17日(日) 於 隠岐島文化会館

第25回 隠岐国巡回講座

○鎌倉幕府と朝廷

- ・古典的イメージ 鎌倉幕府(武家政権—中世) → 朝廷(貴族政権—古代)を克服
- ・鎌倉幕府 = 朝廷や天皇・院政のもとで軍事・警察的な役割を担う権力(軍事権門)
天皇や院、都を守護する役割を担う / 承久の乱後その役割は一層拡大〔木村16〕
(京都大番役/承久の乱後…六波羅探題、籌屋、院御所の大番役など)

○鎌倉幕府と「謀叛人」

- ・承久の乱… 当初幕府は上皇に従う武士たち(藤原秀康、三浦胤義)を「逆臣」とし追討目的とする
⇒ 乱後には上皇本人を明確に処罰(流罪) = 上皇自身が「謀叛人」として扱われる
- ・後醍醐天皇… 倒幕計画 = 「当今御謀叛」「公家御謀反」と呼ばれる
「謀叛」 = 本来国家(朝廷・天皇)に対する反逆行為 → 天皇や上皇が「謀反」?

○鎌倉幕府 = 戦争(源平内乱)の中で生み出された権力〔川合04〕

- ・頼朝軍 = 反乱軍として出発、敵対勢力の所領を独自に占領、配下の武士に分け与える
⇒ 官軍(朝廷の軍隊) = 勝手に敵軍の所領を処分できない(朝廷の指示必要)
 - ・頼朝軍… 内乱の経過の中で、「官軍」へ転身し平家軍などを追討
→ 朝廷は頼朝軍の軍事活動を黙認、頼朝軍独自の判断で「謀叛人」が取り締まられていく
 - ・内乱終結後 頼朝の勢力は軍事・警察機能担う権力として定着 = 鎌倉幕府
頼朝軍が独自に配分していった権益 = 「地頭職」として朝廷に認められる
 - ・鎌倉幕府 = 朝廷の意向に関わりなく「謀叛人」を独自に認定しうる権力、朝廷も合意〔川合19〕
→ 朝廷と幕府(公・武)が協調して成り立つ国家秩序を乱す行為 = 天皇・上皇も「謀叛人」に
※後鳥羽の処分 = 公家社会でも合意、「不徳」な後鳥羽観によって合理化・正当化〔川合04〕
- ★「治天の君」後鳥羽上皇の隠岐配流 = 鎌倉幕府という権力の性格に起因する事態
(「鎌倉時代」を象徴する事件)

3. 隠岐の後鳥羽上皇と都の人々

(1) 隠岐配流と『遠島百首』

○承久3年(1221) 鳥羽殿に移る 藤原信実による似絵

- ・7月8日 出家 / 13日 隠岐へ出発 / 27日 「出雲国大浜湊」到着 = 「見尾崎」 = 美保関
- ・8月5日 隠岐国海士郡刈田郷(現・海士町)に到着

○後鳥羽の行在所 = 「仙宮は翠帳紅閨を紫扉桑門に改め」(『吾妻鏡』)

- ・「紫扉桑門」 = 出家者の住処 → 後に寺院(源福寺)に生成カ〔平田09〕

○〔平田09〕 隠岐の描写 = 中世の他の配流者と異なる描き方

Ex) 俊寛—鬼界島(『平家物語』)、崇徳院—讃岐国(『保元物語』)

→ 在地の豪族たちのバックアップ、文化的生活を保つ

2023年9月17日(日) 於 隠岐島文化会館

第25回 隠岐国巡回講座

○『遠島百首』〔田淵 01/10〕〔平田 09〕〔寺島 15〕…配流後ほどなくして詠まれたとされる
後鳥羽院の近臣たちに読まれ、隠岐における後鳥羽詠歌の中でももっとも広く享受される

・巻頭歌「かすみ行く 高嶺を出づる 朝日影 さすがに春の 色をみるかな」

…「都」を基準に隠岐の「異郷」性を見るめる院の意識〔寺島 15〕

都や本土と変わりなく季節を感じ取る〔平田 09〕

→ 隠岐という異土を和歌の風景に取り込むことを意識した作品群〔平田 09〕

・和歌を通じた隠岐の後鳥羽と都の近臣の交歓〔田淵 10〕

Ex) 後鳥羽院 「我こそは **新島守**よ 隠岐の海の 荒き浪風 心して吹け」(『遠島』97)

「同じ世に 又すみの江の 月や見ん 今日こそよそに **隠岐の島守**」(『遠島』99)

藤原家隆 「もののふの **新島守**も 心あらば 君に悲しき 月や見るらん」(『壬二集』3063)

※藤原定家『定家物語』「新島守」=家隆一派が頻りに詠む(やや皮肉的に言及)

★上皇の隠岐配流 → ほどなくして“隠岐”の要素を積極的に取りれた文芸活動(和歌)は始める

(2) 隠岐の上皇と都の人々

○都から付き従った人々〔田淵 10〕

・伊賀局(亀菊) もと白拍子、後鳥羽の寵姫

・西御方 坊門信清の娘、道助・頼仁・礼子(嘉陽門院)の母、後に病のため帰京

・民部卿局 藤原親兼の娘、西御方の代わりに隠岐に入る

・内蔵頭清範 下向途中で帰京カ、都と隠岐を往還して情報収集

・藤原能茂(西蓮) 隠岐配所に近侍する中心的な存在 / 友茂 能茂の子息

・藤原(水無瀬)親成 父・信成は京都にとどまり連絡役、旧臣のまとめ役つとめる

・少輔局 源家長の娘、家長はしばしば藤原定家に院の動向を伝える

→ 隠岐配流にともなって、少数ではあるが近臣や女房たちが上皇に近仕

隠岐と都の間では近臣たちが往来(ただし隠岐の上皇との面会には厳しい制限あり)

○和歌をめぐる都とのやりとり〔田淵 10〕

・藤原家隆 …後鳥羽の近臣 / 隠岐における後鳥羽の文芸活動のほとんどに関わり

・家隆の子・隆祐に詠歌を褒める書状送る(『隆祐集』)

・如願(藤原秀能)が承久の乱後に詠んだ歌 → 後鳥羽撰の『時代不同歌合』初撰本に採収

・都で実施された歌合の詠草なども入手 ex)貞永元年(1232)『洞院摂政家百首』『光明峰寺摂政家歌合』

○都の家族との音信

・卿二位兼子(後鳥羽の乳母・後見役)、七条院(後鳥羽の母)、修明門院重子(後鳥羽の妃、順徳の母)

→ 書状や和歌・歌書、頻繁に往来

・安貞2年(1228)七条院 / 寛喜元年(1229)卿二位→それぞれ管理する所領が修明門院へ譲与

→「遠所仰」=隠岐にいる後鳥羽の指示によって所領譲与実施

修明門院が都に残された後鳥羽の孫(順徳の皇子女)を養育・後見する経済基盤に

→後鳥羽院は隠岐にいながらしして、後鳥羽王家の家長として「家」運営〔曾我部 19〕

★隠岐の後鳥羽上皇 近臣たちが都と往来 書状のやりとり / 後鳥羽「王家」の家長であり続ける

2023年9月17日(日) 於 隠岐島文化会館

第25回 隠岐国巡回講座

(3) 後鳥羽院還京運動と和歌

○嘉禎3年(1235) 後鳥羽院と順徳院の還京案を九条道家が幕府に提案

・天福元年(1233)～藻壁門院(四条天皇母、九条道家の娘)

天福2年(1234) 後堀河院、仲恭天皇(九条廢帝)死去

→ 後高倉王家・九条家に関わる重要人物の死去、隠岐の後鳥羽の「御怨念」(怨霊、祟り)の噂広がる

・九条道家…九条家(撰関家)当主。仲恭天皇(後鳥羽孫、順徳皇子/九条廢帝)の外戚。

承久の乱後、一時失脚・復歸。子息・頼経は鎌倉幕府將軍(攝家將軍)

〔井上08〕承久の乱後の道家周辺には後鳥羽院・順徳院に連なる人々が集まる

・鎌倉幕府 執権・北条泰時 → 後鳥羽・順徳の歸京要請を拒絶

泰時=承久の乱の幕府軍大將、戦後処理の責任者/乱後の戦後処理方針を貫く〔川合09〕

→ 後鳥羽の歸京は実現せず

○嘉禎元年～3年 集中的に和歌の詠進、歌集の編纂を実施〔田淵10〕

『詠五百首和歌』(『遠鳥五百首』)、『遠鳥御歌合』、『時代不同歌合』(再撰本)、

『定家家隆兩卿撰歌合』、『隠岐本新古今集』

○『遠鳥御歌合』…嘉禎2年(1234) 隠岐・都双方の院に近い歌人たちが和歌詠進、結番〔田淵10〕

・友茂・水無瀬親成・善真法師… 隠岐で後鳥羽に近侍する人々、初学者である3人に和歌指導も

・後鳥羽—藤原家隆 十番 … 家隆歌3首勝/6首持(引き分け)/後鳥羽1首勝

→ 御製は負けないという常識によらず判定/近臣家隆の和歌を尊重

○『隠岐本 新古今集』

・嘉禎2年(1234)頃～『新古今和歌集』を再度改訂、全体配列そのまま400首削除して精撰

・後鳥羽自身の和歌 最多の18首削除、後鳥羽の親族や近臣の和歌削除比重高い〔寺島15〕

→ 後鳥羽の影響力を拭い取り、新古今時代を代表する歌人を尊重・強調

★歸京かなわず ⇔ 和歌への熱心な取り組み/「治天の君」としての姿から変化

(4) 最晩年の後鳥羽上皇

○最晩年の後鳥羽を語る書状 後鳥羽上皇の自筆書状、西蓮(藤原能茂)など〔田淵01/10〕

○暦仁2年(1239)2月9日付「後鳥羽天皇宸翰御手印置文」(水無瀬神宮所蔵、国宝)

・暦仁2年…2月7日に改元されているため実際には延応元年

・後鳥羽の近臣である藤原親成に水無瀬・井内兩莊の相続を約束

→ 親成の一族(水無瀬家)は離宮があった水無瀬に御影堂を建立し、後鳥羽死後供養

・出雲国加賀・持田莊…蓮華王院領。藤原信成(親成の父)が領主

→ 親成への譲渡を指示 / 信成への念押し(三条西家文書)

○延応元年(1239)2月22日 没(60歳)

2023年9月17日(日) 於 隠岐島文化会館

第25回 隠岐国巡回講座

おわりに—没後の後鳥羽像—

◀「後鳥羽院」の誕生▶

- 「顕徳院」諡号…後鳥羽没後3ヶ月、迅速な対応＝怨霊を恐れる九条道家〔徳永 05〕
- 仁治3年(1242) 四条天皇、12歳で急死 ＝ 後堀河皇統の断絶 / 後鳥羽怨霊説の高まり
 - 次期天皇〈候補①〉 忠成(順徳院の皇子) — 九条道家が推挙
 - 〈候補②〉 邦仁(故・土御門院の皇子) — 土御門定通が後見
- 幕府は邦仁の即位を要求、邦仁＝後嵯峨天皇の誕生
 - ＝ 承久の乱後の戦後処理政策の維持〔川合 09〕 ※土御門院…承久の乱に積極的に関与せず
- 後嵯峨天皇＝後鳥羽の孫 / 後鳥羽にとっては順徳系統が正統、修明門院による仏事
- 仁治3年(1242)「顕徳院」→「後鳥羽院」追号の変更
 - ＝後鳥羽怨霊の否定、後嵯峨が後鳥羽の正統な後継者であることを主張
 - ⇨ 順徳院怨霊＝後嵯峨皇統批判の象徴
- ・後嵯峨皇統の定着 → 怨霊を否定せず供養(水無瀬御影堂) / 帝徳批判も

◀火葬塚から隠岐神社へ▶

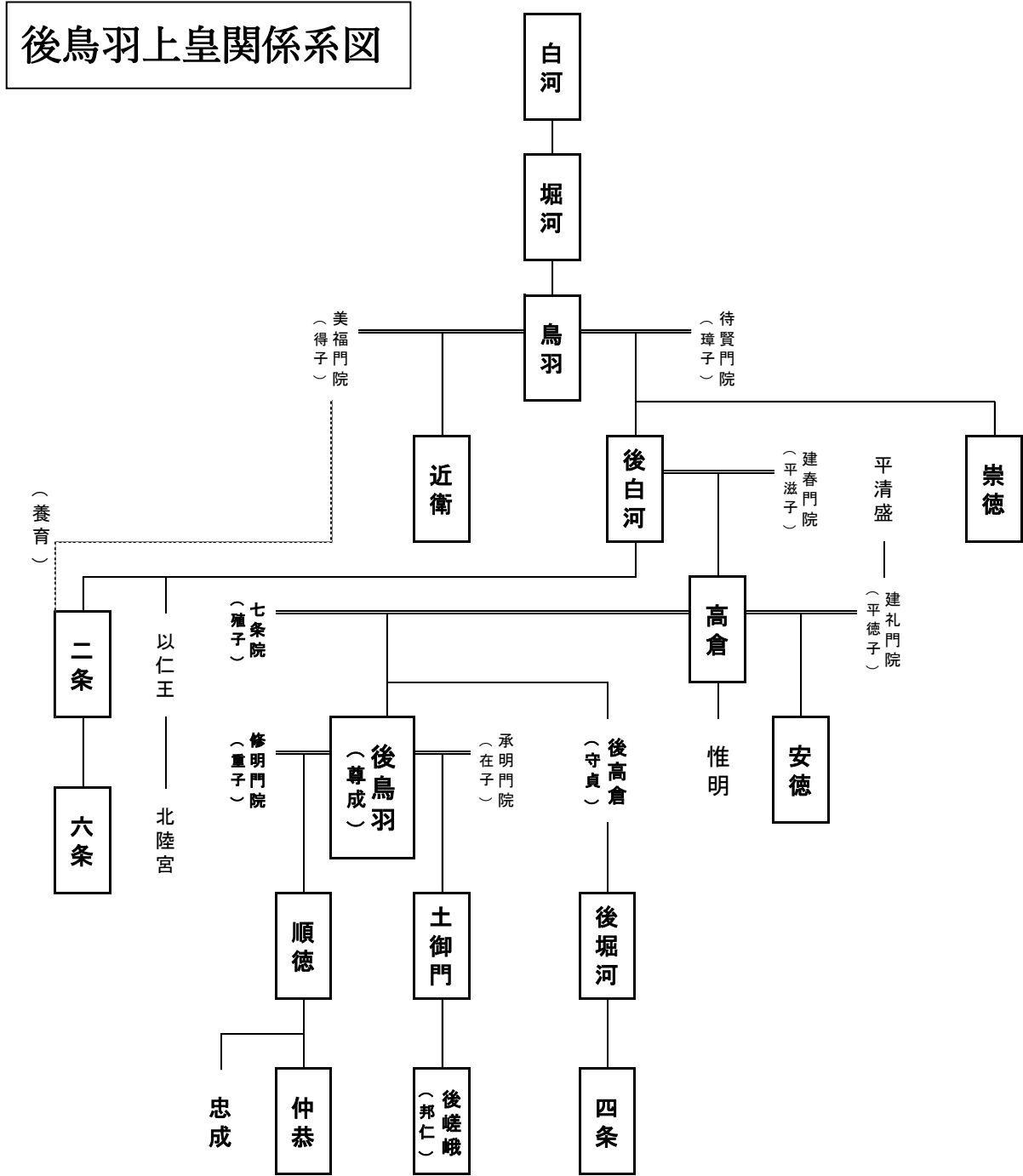
- 延応元年(1239) 隠岐で火葬、遺骨は京都・大原へ
 - ・〈近世〉火葬塚は「後鳥羽院御堂」として管理 源福寺と松江藩
 - 〈明治〉廃仏毀釈による源福寺の衰退、村上助九郎へと管理委託〔鍛冶 13〕
- 後鳥羽を祭神とする神社創建運動 → 実現せず / 水無瀬宮への神霊奉還〔橋本 18/22〕
 - 1930年代に神社創建運動本格化、1939年 隠岐神社造営完了、鎮座祭・後鳥羽天皇七百年式年祭
- 「建武中興」(後醍醐) — 「承久の変」一連のものと捉える歴史観、南朝中心顕彰の動き〔橋本 18〕
 - ・1930年代 隠岐神社創建運動 / 隠岐への観光誘客の盛り上がり〔有馬 16〕
 - ・国際観光局長 田誠のインタビュー記事(『島根評論』13-11、1936年)
 - 「(田誠) 兎に角隠岐では後醍醐天皇がお流されになつて御難儀をなさつたと言ふことは相当歴史に於ても有名な話ですが、隠岐に行つて実際見ますと、後醍醐天皇より寧ろ後鳥羽上皇の方が印象が深いですね」
 - 「(記者) それはさうでせう、後醍醐天皇は後に御運が開けて建武の中興と云ふやうなことになりましたが、後鳥羽上皇は結局あすこで御運が開けずにおかぐれになりました、十九年ばかり居られたさうです」
 - 「(田誠) 皇室の御衰微した時代には斯う云ふ御難儀をなさつた、それを今の皇室の御盛んなことに比較して、日本人の頭に印象させると云ふことは一つの考へるべきことだと思ひます」
 - ※〔平山 21〕1910年代の天皇関係の一連の事件(大逆事件、明治天皇の重態と死去、乃木希典殉死)
 - 『身体』をベースにした天皇尊崇の発露を至高視する思潮(感涙、土下座 etc)
 - ＝ 明治末～戦前特有の空気感の中で、隠岐配流は「国民なら当然涙を流すべきエピソード」に
- ★その時々々の為政者・国家に”都合の良い”後鳥羽像
 - ⇨ 地域としてのアイデンティティ、それぞれの後鳥羽像

2023年9月17日(日) 於 隠岐島文化会館

第25回 隠岐国巡回講座

参考文献

- ・〔秋山 00〕秋山喜代子「後鳥羽院と蹴鞠」同『中世公家社会の空間と芸能』山川出版社、2003、初出 2000
- ・〔秋山 03〕秋山喜代子「西面と武芸」同『中世公家社会の空間と芸能』山川出版社、2003
- ・〔有馬 16〕有馬誉夫『島根の観光レジャー史(大正、昭和戦前)』ハーベスト出版、2016
- ・〔井上 08〕井上幸治「九条道家政権の政策」『立命館文学』605、2008
- ・〔上横手 94〕上横手雅敬「後鳥羽上皇の政治と文学」同『権力と仏教の中世史』法藏館、2009、初出 1994
- ・〔鍛冶 13〕鍛冶宏介編『海士町村上家文書調査報告書』海士町役場、2013
- ・〔川合 04〕川合康『鎌倉幕府成立史の研究』校倉書房、2004
- ・〔川合 09〕川合康『源平の内乱と公武政権』吉川弘文館、2009
- ・〔川合 19〕川合康『院政期武士社会と鎌倉幕府』吉川弘文館、2019
- ・〔木村 16〕木村英一『鎌倉時代公武関係と六波羅探題』清文堂出版、2016
- ・〔坂井 18〕坂井孝一『承久の乱』中央公論新社、2018
- ・〔島本町 75〕島本町史編さん委員会『島本町史』本文編、島本町役場、1975
- ・〔関 12〕関幸彦『承久の乱と後鳥羽院』吉川弘文館、2012
- ・〔曾我部 19〕曾我部愛「鎌倉期王家の構造と変容」同『中世王家の政治と構造』同成社、2021、初出 2019
- ・〔谷 10〕谷昇『後鳥羽院政の展開と儀礼』思文閣出版、2010
- ・〔田淵 01〕田淵句美子『中世初期歌人の研究』笠間書院、2001
- ・〔田淵 10〕田淵句美子『新古今集 後鳥羽院と定家の時代』角川学芸出版、2010
- ・〔田村 98〕田村柳壺『後鳥羽院とその周辺』笠間叢書、1998
- ・〔辻 17〕辻浩和「後鳥羽と〈遊女〉」同『中世の〈遊女〉』京都大学学術出版会、2017(初出 2007・2008)
- ・〔寺島 15〕寺島恒世『後鳥羽院和歌論』笠間書院、2015
- ・〔徳永 05〕徳永誓子「後鳥羽院怨霊と後嵯峨皇統」『日本史研究』512、2005
- ・〔豊永 00〕豊永聡美「後鳥羽天皇と音楽」同『中世の天皇と音楽』吉川弘文館、2006、初出 2000
- ・〔豊永 17〕豊永聡美『天皇の音楽史 古代・中世の帝王学』吉川弘文館、2017
- ・〔中澤 97〕中澤克昭「王権と狩猟」同『中世の武力と城郭』吉川弘文館、1999、初出 1997
- ・〔長村 15〕長村祥知『中世公武関係と承久の乱』吉川弘文館、2015
- ・〔橋本 18〕橋本紘希「一九三〇年代における歴史顕彰と神社創建」羽賀祥二編『近代日本の歴史意識』吉川弘文館、2018
- ・〔橋本 22〕橋本紘希「後鳥羽・土御門・順徳三天皇の神霊還遷と明治国家」『藝林』71-1、2022
- ・〔平田 09〕平田英夫「隠岐の後鳥羽院」鈴木彰・樋口州男編『後鳥羽院のすべて』新人物往来社、2009
- ・〔平山 21〕平山昇「明治の終わり」と宗教(島蘭進・末木文美士・大谷栄一・西村明編『近代日本宗教史 第二巻 国家と信仰—明治後期』春秋社、二〇二一)
- ・〔美川 01〕美川圭「鳥羽殿の成立」上横手雅敬編『中世公武権力の構造と展開』吉川弘文館、2001
- ・〔美川 14〕美川圭「後鳥羽院」平雅行編『公武権力の変容と仏教界』清文堂出版、2014
- ・〔目崎 01〕目崎徳衛『史伝 後鳥羽院』吉川弘文館、2001
- ・〔吉野 15〕吉野朋美『後鳥羽院とその時代』笠間書院、2015



○手に取りやすい一般書 今回の講演内容に関わって

- ・〈後鳥羽上皇という人物〉 目崎徳衛『史伝 後鳥羽院』吉川弘文館、2001
- ・〈後鳥羽上皇と和歌〉 田淵句美子『新古今集 後鳥羽院と定家の時代』角川学芸出版、2010
- ・〈後鳥羽上皇と承久の乱〉 坂井孝一『承久の乱』中央公論新社、2018
関幸彦『承久の乱と後鳥羽院』吉川弘文館、2012
- ・〈後鳥羽上皇が生きた時代〉 川合康『源平の内乱と公武政権』吉川弘文館、2009